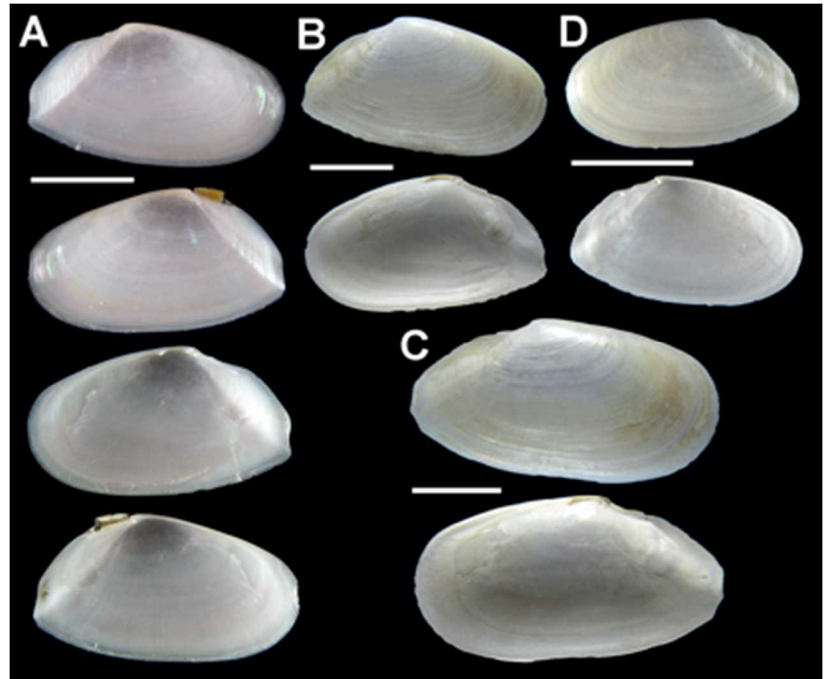


選定理由 現存産地が県内にわずかしかなく、棲息環境も限定的で、危機的状況にあると考えられる。

形態 原記載は Fukuda *et al.* (2022: 118–125, figs 1–4)。従来 *Nitidotellina minuta* (Lischke, 1872) ウズザクラと混同されてきたが、後種にはない一對の強い稜角が殻頂から後背縁に沿って斜めに走り、後端が明瞭に彎入する点で識別できる。それらの特徴は一見すると *Hanleyanus* Huber, Langleit & Kreipl in Huber, 2015 クモリザクラ属の種を想起させるものの、本種の鉸歯や套線の形態は *Nitidotellina* Scarlato, 1965 サクラガイ属の一員であることを示す。しかし後端の明瞭な彎入はサクラガイ属では類例が一切知られておらず、同属種としては特異である。本種に最も近似する種は中国広東省産の *N. sinica* Xu & Zhang, 2018 カントンザクラであるが、この種の後背縁の稜角は鈍く、後端も彎入しないため区別可能である。本種は殻長約 13 mm、殻高約 7.5 mm、楕円形で膨らみは弱く、薄質、多くの個体は殻の中央部のみ淡桃色で、腹縁は白色。死殻では色彩が失われて白色となる。殻表は細く明瞭なレール状の成長輪肋を等間隔に並べる（ウズザクラでは微弱でより細かい）。殻皮は薄い。套線彎入はウズザクラより本種の方がより深く顕著で、前閉殻筋痕のすぐ近くまで及ぶ。鉸歯は 2 個の短い主歯が殻頂直下に八の字形に並び、さらに右殻のみに生じる牙状の前側歯、および右殻・左殻ともに低く不明瞭な後主歯からなる。足は幅広い三角形で先端が鈍く尖り、扁平で白色。水管は細いがウズザクラほど長く伸長せず短い。入水管の先端は顕著な鋸歯状の切れ込みを複数生じて王冠形をなす (Fukuda *et al.*, 2022: fig. 1D に生体写真)。

写真： A: 玉野市胸上波張崎沖 水深 22 m 泥底、生貝, OKCAB M24108。B–D: 岡山市南区小串米崎沖 水深 5.2 m 泥底、半片死殻, OKCAB M24561。すべて福田撮影。スケールは各 5 mm。



分布 タイプ産地は「広島県竹原市ハチの干潟賀茂川河口沖ハチ岩附近, 34°19'25" N, 132°53'51" E」。岡山県内の既知産地は次項で述べる。他に和歌山県和歌山市名草浜 (江川, 2022: text-figs), 山口県山口市秋穂漁港, 愛媛県西条・今治・松山各市と西宇和郡伊方町 (以上福田他, 2022; Fukuda *et al.*, 2022), 福岡県柳川市沖の有明海 (松隈明彦氏私信, 2022 年) から産出が確認され、これらのうち今治・松山両市では少数の生貝が得られているが、他の記録はすべて死殻である。また、愛知県田原市の豊橋層 (更新統千葉階: 中期更新世; 約 33 万年前) から本種に同定可能な化石が産出する (川瀬他, 2015: 61, pl. 29, fig. B114, as *Nitidotellina pallidula* (Lischke, 1872) ハツザクラ [誤同定])。このためかつては少なくとも本州中部～九州の広範囲に分布していたと考えられるが、現在は紀伊半島北西岸、瀬戸内海中央部～西部、有明海奥部でのみ見出される。国外からは一切知られておらず、日本固有種の可能性が高い。

生息状況 タイプ産地のハチの干潟ではウズザクラとともに、干潟下部 (大潮の干潮時の波打際附近) の砂泥底に産出するが、本種の個体数はウズザクラよりはるかに少なく、1 時間程度の採集ではウズザクラ 20 個体以上に対して 1 個体前後しか現れない (福田他, 2022: 112, text-figs A–D)。その他の産地では主として潮下帯上部 (水深 5–22 m) の砂泥底または泥底においてドレッジによって採集され、蛸壺でも死殻が得られているが、浜に打ち上げられることは少ない。比較的調査しにくい環境に低密度で少産するため、最近まで存在が認識されてこなかったものと考えられる。岡山県では現時点で瀬戸内市牛窓町牛窓黄島・前島沖の水深 13–21 m (ドレッジ, 2014 年 1 月 27 日採集, 国立科学博物館地学研究所蔵 NMNS PMR 5062–5064; OKCAB M29051, M29453), 岡山市東区正儀飯盛岩附近 (砂浜打上, 2018 年 10 月 21 日採集, M29306), 同市南区小串米崎沖の水深 5.2 m (ドレッジ, 2002 年 9 月 18 日, M24561), 玉野市胸上波張崎沖の水深 22 m (ドレッジ, 2002 年 9 月 18 日, M24108) の 4 産地で確認されているが、このうち生貝は瀬戸内市牛窓と玉野市波張崎沖からの計 3 個体のみで、他はすべて死殻である。もともと少数個体が低密度で局所的に産出する種とみられるが、干潟の埋立・干拓等による縮小や、水質汚濁等の環境悪化によって分布域全体で既に大幅に衰退した可能性が高く、個々の地域個体群はもちろんのこと、種自体が絶滅の危機にあると見なすのが妥当である。生貝が同一県内の複数地点で確認されたのは今のところ岡山・愛媛両県のみであるが、それらの海域に存在する個体群はいずれも小規模で安定的とはいいがたく、今後の環境条件の変化いかんでいつ消滅しても不思議でない状況にある。

(福田 宏)

引用文献

- 江川和文 2022 (online 28 Nov.). ハチザクラ. In 和歌山県環境生活部環境政策局 環境生活総務課自然環境室 (編), 保全上重要なわかやまの自然 —和歌山県レッドデータブック— (2022 年改訂版). 和歌山県環境生活部環境政策局 環境生活総務課自然環境室, 和歌山. <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/032000/032500/yasei/reddata.html>
- Fukuda, H., Ishikawa, H., Ito, S. & Haga, T. 2022 (online 3 Jun.). *Nitidotellina hachiensis* n.sp. (Bivalvia: Tellinidae) from the Seto Inland Sea, between Honshū and Shikoku, western Japan. *Molluscan Research*, **42**: 115–127. <https://doi.org/10.1080/13235818.2022.2068112>
- 福田 宏・石川 裕・近藤裕介 2022 (15 Apr.). ハチザクラ (新称). In 近藤裕介・大塚 攻・佐藤正典 (編), ハチの干潟の生きものたち —広島県竹原市に残る瀬戸内海の原風景—, 112. Pubfan, 東京.
- 川瀬基弘・市原 俊・河合秀高 2015 (19 Mar.). 中部更新統渥美層群の軟体動物化石. 瑞浪市化石博物館研究報告, (41): 51–131. <http://www.city.mizunami.lg.jp/docs/2015031900036/files/008BMFM41.pdf>